

ウィトゲンシュタインの「規則に従う」論および私的言語論から見てくると

子野日俊夫

序

20世紀を代表する哲学者ウィトゲンシュタイン(1889-1951)は、周知のように『論理哲学論考』(1919)をもって学界に衝撃的に出現した。そこでは、冒頭の「1 世界は事例であるものの全体である。」から、有名な最後の「7 語り得ないことに関しては、人は沈黙しなければならない。」まで、すべての命題が番号付けされて配置され、その中で言語と世界の関係、命題間関係、そして語りえない事柄についてまで、一つの秩序をもって論じられた。しかしその後相当期間の研究の一線からの離脱を経て形成された、その後期の哲学においては、この前期の哲学とは様相を一変させる。そこでは何よりも哲学そのものをさえ否定しかねないほどに、自らのかつてのものも含めて、従来の哲学的思考が批判される。その後期の思想の中心にあるのが『哲学探求』(1953)であり、それはウィトゲンシュタインが用意した原稿を、彼の死後弟子たちが出版したものである。われわれは本論文において、この書を問題とするわけであるが、それに先だって、ここでの中心的概念に関して少し見ておきたい。その中心的概念とは言語ゲームである。言語とは何よりも言語ゲームであるというのが、後期のウィトゲンシュタインの主張である。

言語ゲームとはいったいどういうものなのか。それを簡単に述べるならば、それは言語を何よりもある行為の完遂ととらえる見方である、といえよう。「ここで『言語ゲーム』という語は、言語を話すということがある活動の、あるいは生形式の、一部分である点を強調させるためである」 (§23)¹⁾。けっしていわゆるゲーム(遊びあるいは駆け引きなど)がその性格をなすと考えるのではない。この『哲学探求』第1節では、人に「5個の赤いリング」と書いた紙を持たせて店に買い物に行かせる例が出ている。その紙を受け取った店の者は、その指示通りに「5」「赤」「りんご」を確かめながら(たとえば「5」ならば、数を5まで数え上げながら)、赤いリングを5個よこすであろう。こうしてそこでの「5つの赤いリング」という語が、ある行為を行わせるわけである。ウィトゲンシュタインは言語を、それに伴う、それが引き起こす、行為との結合においてとらえようとするのである。したがってそこには複数の人間が存在することになるわけであるが、しかしウィトゲンシュタインの観点は、何よりもその行為自体、どのように語が使用

されるかという点への着目にある。そしてまた「われわれの言語ゲームは原初的な振る舞いの延長である」²⁾とも語られる。それはそのまま原初的なものにつながっているのである。であるから、言語ゲーム自体のさらに根拠を求めることはなされない。ここにひとつの原初的なもの、あるいはわれわれにとっての根源的なものが出て来ている、と彼は考えるのである。ここにウィトゲンシュタイン独自の世界観が存している。

さて、『哲学探求』ではこの言語ゲーム的言語観を基礎として種々の問題が展開していくのであるが、われわれは以下において、それらのうちの、いわゆる「規則に従う」論と私的言語論とを取り上げ、その議論の本質とその有効性に関して若干考察したい。

1 「規則に従う」論

われわれは、規則は言語あるいはそれに相当する記号で示され、それに従うとはその文言あるいは記号を正しく解釈すればいいことであり、それは容易なことである、そこに何ら困難は生じない、と普通は考えている。しかしウィトゲンシュタインはこの事態に異議を唱えるのである。われわれはここでは、その中心的な議論の箇所注目しよう。それは §201 である。以下にその全文を掲げよう。

「われわれのパラドックスとはこういうものであった。規則はいかなる行為の仕方をも規定しえないであろう。なぜならどんな行為の仕方でもその規則と合致させうるから。それに対する答えはこうだった。どの行為のし方も規則と合致させられるのであるならば、それはまた合致しない事態へいたらせることもできる。したがって、ここには合致することも合致しないことも存在しないだろう。

ここには誤解があるということは、以下の点においてすでに示されている。すなわち、われわれはこうした思惟の過程において、解釈に解釈を連ねている、ということである。どの解釈も少なくともある瞬間はわれわれを安心させるが、それもわれわれが、またこの解釈の後ろにひかえる解釈を考えるまでの間のことでしかない。このことによってすなわちわれわれは、解釈とは違う、規則の把握が存在する、と表明するのである。それは、規則の適用の各場合に依じて、われわれが「規則に従う」「規

則に従わない」と呼ぶ事態の中に表現される、そうした把握である。

それゆえ、規則に従うどの行為も解釈である、と語る傾向がある。しかし、規則のある表現を別の表現で置きかえることをのみ、人は「解釈」と呼ぶべきであろう。」

この節でワイトゲンシュタインは、規則に従うことをめぐってパラドックスがある、と語る。それは端的に、規則は規則と称しながら、それ自体で行為を厳密に規定することはできない、というものである。§198でも、「どんな解釈も、解釈されるものとともに宙にぶら下っている。解釈は、解釈されるものの支えとなりえない。解釈だけでは意味を規定しない。」と言われていた。ここで「われわれのパラドックスとはこういうものであった。」と過去形で言われるのは、そうした事態を受けている。ここでワイトゲンシュタインが言おうとしていることとはつまり、ふつう規則とは行為の仕方を規定するものと考えられているが、実はどのような行為でもその規則と合致させうるのであって、したがって規則は行為を規定し得ないのだ、というパラドックスが存在するというのである。彼があげる例は、たとえば道しるべを見て、人はその尖った方向に、そこに書かれた目的地がある、と考えるが、それはけっしてその矢印自体にそうした指示が含まれているのではない、といったものである。規則が行為を規定しないとしたら、これ以上のパラドックパラドックス、逆理はない。

しかしパラドックスが生じる場合、そこには多くの場合誤解が潜んでいるものである。ワイトゲンシュタインはここでのパラドックスに関してもそうした誤解がある、と考える。（「ここには誤解があるということは・・・」という文言）。そしてその誤解とは、ワイトゲンシュタインによれば、規則とは解釈されるものである、と考える誤解なのである。規則をそのようなものと考えて、一つの解釈を与えても、すぐにまたそれとは別の解釈が思いつかれ、そうやっていつまでたっても最終的決定的な解釈が得られない。しかし実際にはそのようなことは起こらずに、世の中では規則の遵守がおこなわれている。ということは、規則は解釈によって従われるのではなく、別の仕方では従われることになる。そこでワイトゲンシュタインは、「このことによってすなわちわれわれは、解釈とは違う、規則の把握が存在する、と声明するのである。」と言うのである。規則を解釈でもって把握しようとしたからパラドックスが生じてしまった。それなら、その点の誤りを正せばパラドックスも解消する、というのがワイトゲンシュタインの考えである。であるから、規則に従う問題において、パラドックスという事態をそ

のままワイトゲンシュタインの最終的な立場と解することがあってはならない³⁾。

では、その「解釈とは違う、規則の把握」とはいったいどのようなものなのだろうか。続く202節で、ワイトゲンシュタインはそのことに対して答えている、と考えられる。それは以下の通りである。

それゆえ「規則に従う」というのは実践である。そして規則に従うと信じることは、規則に従うことではない。またそれゆえひとは規則に「私的に」従うことはできないのである。なぜなら、さもないと、規則に従うと信じるのが規則に従うことと同じことになってしまうであろうから。

ここでまず、冒頭の「それゆえ」は前節をうけている、と考えるのが当然であろう。そうだとすると、第一の文で言う「実践」とは、単にあれこれと頭の中で解釈することと区別される、つまり思惟に対する実践の意味と理解される。あくまでも実践の中で、規則に従うという事態は成立する、とワイトゲンシュタインは言うわけである。では次の文に言われる、規則に従うと信じることと規則に従うことの区別とはどのようなものか。前文の解釈からすれば、規則に従うと信じるとは、単に頭の中だけで規則を解釈することを別の表現で言い直したのとも考えられるが、かならずしもそうする必要はない。文冒頭の「そしてUnd」は、また新たなことを述べる「そして」とわれわれは考える。つまりここでもあくまでも実践を問題としつつも、その行為者が規則に従っていると信じて行為しても、単にそれだけでは、その行為が規則に従うものにそのままなるのではない、とワイトゲンシュタインは言っているのである。

では行為者個人の行為を、規則に従ったものとするのは何なのであろうか。ワイトゲンシュタインの直接の弟子でもあるマルカムは、次のように述べる。

「彼〔ワイトゲンシュタイン〕が202節で言い表している絶対的に根本的な重要性を持つ考察は、人が規則に従うことと規則に従うと人が考えることとの間の区別である。まったく人間社会に属したことのない人物が、自分で規則を作ってそれに従おうとする場合をあなたが想像してみるならば、そうした区別の足場がないことにあなたは気づくであろう。」⁴⁾ つまり個人が単独で規則に従おうとする場合、彼には、自分が単に規則に従っていると信じているだけなのか、あるいは本当に規則に従っていると言えるのか、その区別を明確にしうる基準が見つからないはずだ、というのである。逆にワイトゲンシュタインがこの区別をしているということから、規則に

*ワイトゲンシュタインの「規則に従う」論および私的言語論から見えてくること 子野日俊夫

従うということは一人の個人によることではなく、社会的なものであると彼が考えていたことが帰結する、とマルカムは考えるわけである。三番目の文の「ひとは規則に『私的に』従うことはできない」というのも、「一人の人間の行為には、それが私的なものであろうと公的なものであろうと、ある規則の意味を確定することはできない。」⁵⁾ ということを意味する。

しかし他方には、ここでの「規則に従うと信じること」と実際に「規則に従うこと」とを区別するものはけっして社会性ではない、という解釈も有力なものとして存在している。その代表例は、ペーカーとハッカーである。彼らは以下のように考える。

「ここでの『実践』が社会的実践を意味しているとしたのは間違った解釈である。ここでの対比は独唱と合唱のそれではなく、譜面を見ることと歌うことのそれである。『実践』の語はここでは、『理論においてと実践において』という語句と同様の意味で用いられている。」⁶⁾

すなわち、202節冒頭の、「規則に従うというのは『実践』である」では、単独の個人による実践とは異なる、社会と連携した実践が意味されているのではなく、単なる思惟ではなく実践である、ということが述べられているのだ、と彼らは主張するのである。そして、「この議論には行為者が多数であることへの言及は全然含まれていないことに十分注意せよ。強調はまったく、一定した繰り返し(regularity)〔まさに規則正しさ〕に、行為の多数回の生起に、置かれている。」⁷⁾ つまり規則に従うということを成立させるのは、その行為がいつも同じように繰り返されることによる、というわけである。

しかしこうした解釈に対しては、たとえば§198で、先にあげた道しるべに関して、「ひとは一定の慣習や習慣がある場合にのみ、道しるべに従うことができる」と言われていることなどから考えると、ワイトゲンシュタインは、けっして個人が単独で規則を成立させようとは考えてないといえよう。

したがってわれわれは、一個人の行為が規則に従うものとなるためには彼以外の者の存在を必要とする、というマルカムの立場に賛成する。規則に従うことはその意味内容の私的な解釈によっては成立しえないのである。何らかの、潜在的な場合も含めて、他者との関わりを、それは必要とするのである。

2 私的言語論

つぎにいわゆる「私的言語」の問題は、「規則に従う」についての考察に続いて§243から始まる。それに続く§244でワイトゲンシュタインは、人の内的経験、直接的で私的な感覚を自分だけの用のために書き記す、そう

いうための言語がはたして可能であろうか、と問題を提出する。内的感覚は当の人間にしか感じるができない。その意味でそれは私的である。その自分の中で起きる私的な感覚を言い表すのが私的言語である。その各語に対応するのは内的な私的な事態であるから、この言語は当人にしかできない私的なものと考えられる。一見当然に思われるこの私的言語を、しかしワイトゲンシュタインは否定するのである。それを端的に論じているのが§258である。その箇所を見てみよう。

§258の議論

ワイトゲンシュタインはここで以下のような場合を想定する。ある感覚(たとえばある痛みなど)がわたしに訪れるたびに、そのことを日記に書き留めることとする。具体的にはEという記号を用いて、その感覚が生じるたびに、Eと書き入れる。こうして用いられ記号Eの意味内容は、すなわち定義は、言葉で表現することはできないであろう。それはあくまでも当人にしか感覚しえないものなのだから。しかし人に伝えることはできなくても、当人には、それは自らのうちに起きるこれだと指示することで、その記号Eが何を意味するかを確定できるようにも思える。しかしワイトゲンシュタインはこれに異論を唱える。それができるという人は、いったん記号Eとある特定の感覚とを結びつけたならば、その両者の結びつきをしっかりと心に刻みつけるというしかたで、「将来わたしが正しくその結合を思い出す」ことが可能であり、記号Eをいつも同じ感覚に対してのみ用いることができるはずだ、と考えるかもしれない。しかしワイトゲンシュタインは、「われわれの場合には、わたしにはこの結びつきの正しさの判定基準がない」といって、それに反論するのである。

つまりここでワイトゲンシュタインが言おうとするのは、われわれは普通にするように、自分の中に生じるある感覚、たとえばある痛みに関し、「また同じ痛みがやってきた」と語ったとしても、それが本当にまた以前と同じものなのかどうか、その判定のしようがないではないか、ということである。マイエチャクも言うように⁸⁾、ここの議論の要点は、記憶の不確かさではなく、記憶が正しいのかどうかその判定の基準が存在しない、という点である。またケニーは、ここでワイトゲンシュタインは、「次回私が何かをEと呼ぶとき、それが本当にEであるかどうかを知るのか？」ではなく、「次回私が何かをEと呼ぶとき、そのEという記号で私が意味するものをどうして知るのか？」⁹⁾と議論しているのだ、と細かく規定しようとするが、その言わんとするところは、何がEであると考えerためには、私は記号Eの意味、そ

れが指し示すもの、を知らねばならないが、私はそれを確定的に知るだけの条件を持ち得ない、ということである。いったんこの感覚をEとしよう、と決めてみたところで、次に似たような感覚におそわれたとき、それが前と同じといえるのか、単に似ているだけなのか、それを何によって知りうるのか、とウィトゲンシュタインは論じるのである。

さて、こうして記号Eに関する私的言語は否定される。「同じ感覚」「同じ痛み」とわれわれは普段言うが、それにEと名をつけて言語化したとたん、それは一定の意味内容をにやうことが求められる。そしてそれを得ることが不可能であることから、Eが言語の資格を有さないことが言われるわけである。こうしてEに代表される私的言語は否定されるのである。

ところが、これと同じ例を使って、まったく違う結論へといたるケースを、ウィトゲンシュタインは考える。それが§270である。それを次に見よう。

§270の議論

議論は以下の通りである。先の§258での「記号Eの、わたしの日記への書き込みの件」の応用を考える。ここではある種の感覚を持つと必ず血圧の上昇が血圧計によって示される、という場合を想定する。そしてそうした経験の繰り返しから、血圧計を使わなくても血圧の上昇を人に言えるようになる。この場合、わたしがその感覚を正しく再びそれと認めたかどうかはまったくどうもよいように見える、とウィトゲンシュタインは言う。わたしがつねにその感覚の同定で誤りを犯すとしても、それは何の問題ともならない。そしてこのことは、かつてはある感覚をEと呼べるかどうかについての誤りを問題としたことが単に見せかけであったことを示している。いわばわれわれは、それでもって機械の何かを操作できるかに見えた取っ手を回したのである。しかしそれは単なる飾りだったのであり、メカニズムとはまったく関わりのないものであった、とウィトゲンシュタインは語る。ではいかなる根拠によって、ここではEはある感覚の標識と呼べるのかといえば、それはおそらく、この言語ゲームにおいてこの記号が用いられる仕方であろう。ではなぜある「特定の感覚」、すなわちいつでも同じ感覚、という言い方ができるのかといえば、まさにわれわれが毎回同じEと書いたと仮定するからである。

以上が§270の全内容である。シュレーダーは「ここで新しい議論が行われているわけではない。§258で提起された内在的批判が形を変えてなされているだけである。」¹⁰⁾と言う。確かに同じような事例の繰り返しの際してそ

の感覚を同定できないという事態は、§258と共通しているが、しかしここでの議論がそこでの議論の焼き直しというのではけっしてない。感覚を正しく同定できないということが、§258では大問題であったのに、ここではもはや何ら問題とならないと言われているのである。

次の「そしてこのことは、この誤りの仮定が単に見せかけであったことを示している。」を考えると、まず「このこと」とは当然前文の「わたしがこの感覚の同定につねに誤るとしても何ら問題ではない」ということを指す。そしてそのことが、「この誤りの仮定が単なる見せかけにすぎなかった」ことを示すというのである。「すぎなかった」という過去形は、「誤りの仮定」というのがこの箇所以前、すなわち§258での事態であることを示すものである。だとすると、ここでウィトゲンシュタインが言おうとしていることは、§258では大問題のように見えた感覚の同定の問題が、実は見かけの問題でしかなかった、ということとなる。同定できないということは客観的事柄にとってどうでもよいことになる、とウィトゲンシュタインは語っていることになる。こうして§258ではあれほどまでに記号Eと感覚との結びつきに関して厳密性が要求されていたのに、ここではそうした点はどうでもよいこととされるのである。

ウィトゲンシュタインはここで、その特殊な感覚と血圧との結びつきに誤りのある場合は想定していない。あくまでもある感覚が存在するときに必ず血圧の上昇が認められる（しかも血圧計という、自分以外の者の目にも明らかな形で）、という事態を想定するのである。そうした前提のもとで、各回の感覚が同一のものであるかどうかについての判定では誤ることがあるが、それでもいっこうにかまわない、というのである。つまり、血圧の上昇を確実に言い当てる、という同じ資質を持つのであれば、それらの感覚がはたして「同じ」と言えるのかどうかは問題とならない、というわけである。それがなぜかと言えば、ここでは血圧計という、本人以外の者の目でも確かめられる事態が成立しているからである。それが「言語ゲーム」なのである。このことによって、そこでの感覚が同じかどうかということは問題とならなくなる。というよりも、それを「同じ」といっていいことになる。§270最後の部分の、「なぜある『特定の感覚』、すなわちいつでも同じ感覚、という言い方ができるのかといえば、まさにわれわれが毎回同じEと書いたと仮定するからである。」とあるのは、感覚が同じであることが証明できたからそれに同じ記号Eを与える、というのではなく、血圧計の上昇という同じ事態がいつも生じるから、それに対応する感覚をEと呼んで、「同じ感覚」とするのである。

*ウィトゲンシュタインの「規則に従う」論および私的言語論から見てくること 子野日俊夫

このようにして、§258で否定された感覚の同一性が、感覚と血圧計という言語ゲームの中では肯定されることとなるのである。

私的言語論と普通呼ばれる箇所はけっしてこれらの箇所だけにとどまるわけではないが、われわれはここにその議論の一つの典型を見るのである。

3 若干の考察

こうした二つの問題に対するウィトゲンシュタインの考えを見た後でいえることは何であろうか。規則に従う問題では、規則自体の解釈によっては規則に従うということにはならず、われわれは社会の習慣が教える実践が「規則に従う」という事態を成立させたのであった。ウィトゲンシュタインの強調するのは、そこでの「行為する」という面であるが、その行為を支えるのは習慣である。この習慣との関わりの仕方は「共同体の合意」、という言い方で表現される¹¹⁾が、行為する個人の側から言えば、それは知的な合意というよりも、共同体との生的一体性の表現という言い方が妥当と思われる。ここでは特定の他者が想定されるわけではないが、そうした共同体との関わりの中で、規則の意味内容が実現するという点では、ここにもひとつの言語ゲームが成立している、といえよう。

私的言語論においても、感覚に関する言語は人の目にさらされることによって、はじめてそれを記号で呼ぶことが可能となるのであった。そこでは私的感覚が血圧計という機器を介して言語ゲームの中にとりこまれるわけである。

こうしてウィトゲンシュタインにおいては、言語の根本にあくまでも言語ゲームがある、ということがわかる。規則や感覚は、言語ゲームを介して社会的、公的なものとしてのみ意味があるわけである。その根底にはある一致が存在する。この一致に関してウィトゲンシュタインは、ある箇所で大変興味深いことを述べている。それは§241である。そこで彼は次のように語る。

それでは君は、人々の一致が、何が正しく何が間違っているかを決定すると言うのかね。——「いや」正しいとか間違っているとかは、人々が語ることに関わる。そして言語の中で人々は一致するのだ。これはけっして意見の一致ではない。生形式の一致なのだ。

ここで傍点を付された二語（「語る」と「言語」）は原文ではイタリックとなっているが、われわれはこの二語に、ウィトゲンシュタインのここでの強調点が凝縮しているのではなく、むしろ「語ること」の「こと(was)」

と、「言語の中で」の「中で(in)」にこそ、対比的な強調が存すると考える。つまりここで彼がいわんとすることは、正しい正しくないを決める人々の一致というものが一方にはあり、それは語られること、語られる内容についての一致であるが、しかし他方に、それとは異なる、意見の一致ではない一致が言語の中にはある、ということである。それが言語の中にある一致、すなわち生形式の一致なのである。そうした一致がわれわれの言語活動、言語ゲームの中には常に含まれる、とウィトゲンシュタインは考えるのである。規則に従う場合でも、そこで重要となるのは、けっして規則内容をどのように理解するのかという、意見の一致ではなく、その規則を通して実現される生形式の一致である。感覚が私性を脱するのはそれがあつた外的なものと結びつくことによってであつたが、そうした外的なものを介して一個人の感覚がほかの人間にも共感されるものとなる際には、そこにはまさに生の形式としてうけとめられた感覚の、その一致があるわけである。

われわれは、こうしたウィトゲンシュタイン的言語観が含む真実と、それによって生み出される価値について少し考えてみたい。

彼は「生形式」について語る。言語を話すということがあつた活動の、あるいは生形式の、一部分であると言ひ、（§23）また言語の中には生形式の一致があつたと言ひ（§241）。彼がこの生形式で何を意味しているかの厳密な規定は、それ自身大きな解釈上の問題である。われわれはここでは大まかな言い方しかできないが、それを、少なくとも同じ文化に属する人々が共有する、自己を社会的関係の中で正当に表現する際の形態を、生の発現の形としてとらえたもの、と規定したい。その一致はけっして意見の一致を強要するものではない。たとえ意見を異にしても、その意見表明の根底に、生体としての人間の緩い連帯が存在している、とウィトゲンシュタインは考えている、とわれわれは解釈する。そして、そうした一致、共有の場に言語行為がもつづくものであることを見定めることが、われわれに求められている。それは討議倫理学が想定する知的なコミュニケーションの場以前の、その前提であると同時にわれわれがつねにそこに立ち返るべき広がりとしてある。それは場という規定さえ狭すぎる広がりである。そしてその広がりにおいて、われわれは言語が私的所有でないことを知るとともに、言語によって規定される意味内容も絶えずあらたな局面、様相を示すことを知るべきである。そうした中での、人々とのゆるやかな連帯、事物との開かれた関わりこそが、ウィトゲンシュタインがそれを示すことこそが哲学の目標であるとした「蠅取り壺を脱する道」（§309）、そ

の道にしたがった者の出会う広がりである、とわれわれは考える。そしてこの広がり、われわれの社会（願わくは国際的レベルも含めて）から無駄な争いを、その多寡はともかくとして、減少させるはずであるというのが、われわれの確信であり、希望である。

結語

もちろんそうした実効性をウィトゲンシュタインの哲学から引き出そうとするのには、われわれのここでの考察はまだあまりにも不十分なものである。たとえば、生形式を、あるいはその一致を、われわれはどのようにしてとらえるのか、また、それを介することで知らない外国語の意味も推定できるとウィトゲンシュタインの語る「人類共通の行動様式」（§206）と、この生形式とはどう関連するのか、それらは同一のものと考えてよいのかどうかなど、今後さらに掘り下げるべき問題は多い。しかし第一の問題に関して一言するならば、生形式ないしその一致をとらえるには、知性でも直観でもなく、より受容的であり、より生に密接した、レヴィナス言うところの感受性sensibilitéの援用が有効ではないか、とわれわれは考える。そのさらに詳細厳密な考察も、今後の課題としたい。

注

1) 以下§の記号を付して示すのは、すべて『哲学探求』の節番号である。また引用文中の〔 〕内は、われわれの補足である。

2) 『断片』545項

3) これはすでに多くの研究者が指摘していることであるが（たとえば、C. McGinn, Wittgenstein on Meaning 1984, p.43 あるいは E. von Savigny, Wittgensteins "Philosophische Untersuchungen" Ein Kommentar für Leser Band I 1994, p.250）、この点において、有名なクリプキの解釈は誤りである、ということになる。（Saul A. Kripke, Wittgenstein on Rules and Private Language 1982）

4) Norman Malcolm, Wittgenstein on Language and Rules, in *Philosophy* 64(1989), p.28

5) Norman Malcolm, Nothing is hidden 1986, p.156

6) G.P. Baker & P.M.S. Hacker, Scepticism, Rules, and Language 1984, p.20

7) 同書, p.20

8) Stefan Majetschak, Wittgensteins Denkweg 2000, S.227

9) Anthony Kenny, Wittgenstein 1973, p.192 英米系

のウィトゲンシュタイン研究では、この私的言語問題に関して、あまりにも細かい議論がなされすぎていて嫌いがある。

10) Severin Schroeder, Das Privatsprachen-Argument 1998, S.136

11) たとえばクリプキは、「規則に従っていると主張する人はだれでも、他の人々によってチェックされうる」と語る。前掲書, p.101